〔翻訳〕

メランヒトン『道徳哲学概要』（その2）
EPITOME PHILOSOPHIAE MORALIS REPETITA ANNO 1548
第1巻
LIBER PRIMUS

菱 刈 晃 夫

徳の行いの原因は何か?
QUAE SUNT CAUSAE ACTIONUM VIRTUTUS?

アリストテレスは徳を態度〔習慣・振る舞い〕と呼んでいる。しかし態度の原因がふさわしい〔適切な〕行為であることは確かである。それから行為にとって作用的で補助的な原因が追究されることが必要となる。あるいは原因、原因と共にあるもの、そして共に作用するものである。

類似の作用因、もしくは原因は、哲学者によれば、精神による正しい判断、そして自由意志であり、正しい判断に従うものである。しかし正しい判断を、正しい理性による命令と呼ぶことは普通である。自然法があって、さらにその他の法もまたそうであるが、それは自然の正しい判断や神の法と一致し調和しているからである。ところで私は上で、この判断は正しい、なぜなら永遠かつ不変の規範と一致し調和しているからであり、それは神の精神の内にあり、十戒の中に明らかにされている、と述べた。確かにしばしば違うようにも言われるのだが、それは自然法であり、道徳に関するそれぞれの知識であり、神的な精神と一致し調和するものであり、十戒の中に明らかにされている、と。

もう一つの原因は意志であるが、その自由については後に述べたいと思う。確かに自由とは知性的な自然本性において神からの特別の贈り物であり、人間においては神の像の一部分であって、神はある自由が残ることを欲していて、その結果として人間は習慣づけられ規律によって支配されるようになる。それどころか後には再生した者なら、さらに神の賜物を保ち続けることになる。

補助的な原因、もしくは原因と共にあるものには三つある。教え、自然の衝動、そして規律である。確かに学問においてこうした補助的な原因が必要であるよう

に、同じく道徳においてもそうである。教え〔学識・学問〕抜きにして誰も建築術を学ぶことはない。というのも、たとえ自然によって私たちがある種の原理を捉えるにしても、それにもかかわらずその自然による知識そのものは、教えによって活発化されて明らかにされなければならないからである。

それゆえに教えの光が消えてしまった、もしくはこれまでにすでに消えている民族のところでは、自然の知識もまた覆い隠されてしまった。ちょうどスパルタ人において男が誰かの妻と会うことを許されていたように。

それゆえに神は自らの声によって法〔律法〕を公示したのだが、それは自然本性の中に記されているとはいえ、それにもかかわらず神の声によって教えが伝えられ、繰り返され、人間に教え込まれるためである。そうして掟が、その意図の明らかなことによって、自然の知識と神の声が一致し調和している、つまりそれは神の法であることが明らかになる。申命記第 6 章で明確に言われているように、子どもたちに繰り返し教え、家に座っているときも道を歩くときも、寝ているときも起きているときも、これを語り聞かせなさい〔申 6, 7〕。つまり覆われて汚れたものを伝えてはならず、あるいは不注意なものを伝えてはならず、入念に仕上げられて輝いたものを差し出し、繰り返し、厳しく規律を求めなさい、ということである。

第二の補助的原因には自然の傾向がある。というのも徳が自然によって助けられるとき、より強力なものとなるのは真実だから。ちょうど音楽家、詩人、画家において、これらを自然がそうした芸術作品の中で補助すると、より力強いものとなるようなものである。こうしてアレクサンドロスやカエサルの中で、勇敢さはより秀でたものとなる。なぜなら彼らは自然の衝動を有しているからであり、あるいはより強力な〔内的〕炎を持っているからであり、これらはこうした徳の原因と共にあるものということになる。しかし、この点で英雄的な徳と普通の徳との違いが考察されねばならない。なぜなら秀でた自然本性の中に燃えるような〔激しい〕衝動を有しているのが、英雄的と言われるからである。

普通の徳は、平凡な人間の中にあり、異常な人間の中にあるのではない。というのも異常ではなく平凡で〔普通の〕自然本性は、教え〔学識・学問〕と習慣づけによって徳へ転じられるからである。なぜなら神はこの人間の自然本性が、教えと徳に対して受容能力があることを欲しているからである。ところで問いは、どこからこの自然本性の違いが来るのか、というところにある。パウロは善き幸せな傾向〔性格〕は神からの贈り物だと言った。しかし自然学者はその原因を気質の中に求める。そして気質と傾向がある程度、星と一致することは明らかである。というわけで星の光が気質と混合されて、傾向に点火させられるのは、疑われようもないことであるから。

規律について
De disciplina.

第三の補助的原因は規律である。これはここでこうした言葉で私たちが理解するように、習慣づけであり、人間の意志の力の内にある。そしておよそ除去的原因に関係している。つまり、およそ誘惑や状況、違反〔罪を犯すこと〕への誘惑、そして高潔な骨折りによってさまよう情欲を抑制することである。ちょうどカトーが言ったように、人間は何もなさざることによって悪をなすことを学ぶ。

そういうわけで人間には高潔な骨折り〔熱心な努力〕が置かれることが必要であり、それはそれ自身によって情欲の馬勒〔手綱〕となる。そして習慣はなすべき高潔な事柄へと、徐々に魂を知性と徳の愛へと向け変えていく。このようにして人は多くの悪を避け、その人は悪しき交際や放蕩を逃れ、舌や、目を支配し、でたらめにさまようことはない。次のようにもっとも真実の言葉がある。罪を避けるということは、罪の機会〔罪を犯しそうな機会〕を避けるということだ。そしてとりわけ教会において私たちは、神の律法が存在していて、その結果として意志は悪徳に抵抗することを知っている。悪徳の炎〔情火〕を燃やして誘惑を受け入れようとする者は、聖霊を波立たせ、聖霊が支配者であることを考えない。なぜなら聖霊はその反対のことをなすからである。もちろん私たちの勤勉も求められる。それゆえにパウロはエフェソ人にこう書き送っている。愚かな者としてではなく、賢い者として、細かく気を配って歩みなさい〔エフェ 5, 15〕。すなわち気を配ってとパウロが言うとき、彼は私たちの中に熟考、注意、そして不品行な〔悪徳の〕衝動を退ける努力があるように、と命じている。そしてこうした慎重さと私たちの努力に神への祈願〔祈り〕がさらに加わり、あたかももう一度その下にと述べるようになる。パウロはすでに老年になって自身についてこう述べている。むしろ、自分の体を打ち叩いて服従させます。他の人に宣教しておきながら、自分の方が失格者とならないためです〔一コリ 9, 27〕。

こうした類似の多くの文章は、私たちに勤勉と、道徳を導く中での注意とを命じているが、これは規律と呼ばれている。人々の間で怠惰は強化されてはならない。人間において外的な行いを支配する中ですべての努力は無価値であり空しいとする意見は特に間違っていて、必然的に次のような結果となる。ちょうどアレクサンドロスがクレイトスを殺害し、アナクサルコスが彼を慰めたように〔プルタルコス『英雄伝』よりアレクサンドロス 50-52〕。これは神に対する誤りであり侮辱でもある。アレクサンドロスがクレイトスを殺さないということが全くありえないというわけではなかった〔殺さないままでいることも可能であった〕。しかしダビデは、助力を請うときには、自身が神から支えられているのを知っていたので、姦通からは大きく離れていられたのである。

したがって私は、教会において語られているような原因について述べようと思う。ちょうどヨセフが姦通を避けるには第一の原因がある。それは聖霊であり、ヨセフの精神の中で神の言葉についての思考に点火し、そこでヨセフの精神は神の言葉について思考することとなる。続いて他方で聖霊はヨセフの意志を神の言葉に服従するように向けさせ、姦通に抵抗するようにさせ、こうして意志そのものを、神の言葉を思い出させることで、さらに自身の努力によって誘惑に抵抗するようにさせ、こうして神の律法を優先するようにするのである。

これらのことが生じる物質
Materia in qua.

人間の魂は、そこに徳が宿る主体〔実体・基体〕であり、認識する能力は脳と結び付けられている。しかし意志は心と結び付けられていなければならない。こうして一緒に意志と心が温和な〔心の〕動きを感じられるようになる。そしてまた心と意志との連結が何らかの方法でない場合には、真の徳もなく、その見せかけ〔偽物〕があることになる。そして、しばしば心の動きは律法に対立し、自らと共に判断を奪い去る。ちょうど制御されていない馬が騎乗者を奪い去るように。さらに判断に対して脳の不活発さが邪魔をし、これは自制心のなさから生じるのだが、その結果として、たとえ注意が脳の苦痛によって混乱させられても、祈りにおいても心は燃えることができない。この脳の苦痛は、混乱した精気、つまり脳の傷害による煙〔蒸気〕から生じる。

形相因
Causa formalis.

行いについて私たちが語るとき、行為そのものの形相とは、すなわち正しい判断に従う意志と心の動き〔運動〕である。ちょうどダビデにおいて、サウルをいたわる怒りの制御が、形相であるようなものである。このように振る舞い〔態度・習慣〕について私たちが語る場合、意志と心の中の強固な傾向が、形相となる。しかし形相因からもっとも正しい定義が取り入れられるとするなら、上に引用した定義が現れ、それがふさわしいものとなる。徳とは、服従であり、それは理性による正しい判断に従って、意志とそれより下位にある潜在能力が従うような、そうした服従である。

目的因
Causa finalis.

哲学では、徳それ自身が目的であり、それ以外のために第一に求められるべきではない、と言われるのが普通である。しかしさらに理性に従ってその他のより重要な目的を付加するのが正しいのであり、それはすなわち神のために徳が求められるということである。ヨセフは神に服従するために寡婦から遠ざかっていたが、こうして姦通によって職を汚すことはなかった。それでも目的の区別に関する共通の教えは保たれるべきである。一つの事柄について様々な目的がありうるが、それでもあるものは主要なものとして、またあるものはより少なく重要なものとして秩序づけられる。第一に徳は神のために求められるべきであるが、その後は永遠かつ現在の報酬のためでよいのであり、それは酷い行いは、この人生においては過酷な罰によって罰せられるからである。ヤコブはこう言う。神が私と共におられ、私が歩むこの旅路を守り、食べ物、着る物を与え、無事に父の家に帰らせてくださり、主が私の神となられるなら、私が記念碑として立てたこの石を神の家とし〔創 28, 20-22〕。

ここでの言説に条件が加えられるとはいえ、それは目的や報償を意味しているのではなく、可能性や仕方を意味していて、それはつまり、もし私が生きようとするなら、この場所で供儀と、集会のために、教会をまとめようということである。こうあるように。主を賛美するのは死者ではない〔詩 115, 17〕。しかしそれでもこのように同様に正しく理解されるのだが、ヤコブはその場と秩序によって身体的善を追い求めたが、しかし、それにもかかわらず第一の目的が優先された。

自由意志はあるのか?
EST NE LIBERA VOLUNTAS?

この問いにおいて単純な真理を追い求めるものにとって、説明は簡単である。まず意志による行為は区別される。外的な運動〔動き〕の選択、あるいは道徳的な行いにおいて、あるいは芸術的な行為において、あるいはどこへでも移動する人間の場所的な動きにおいて、ちょうどスキピオが自分を抑制できて、他の者の婚約者を奪わなかったような場合〔リウィウス『ローマ建国の歴史』26, 5〕。ファブリキウスは自分を抑制することができて、フュルルスから送られた金を受け取らなかった。画家は鹿あるいはキマエラ〔おとぎ話に出てくるような動物〕を描くことができる。プラトンはアカデミアから町へ行くこともできるし、行かないこともできる。そうした選択において、そしてすべての外的な運動において、人間の意志は経験からしても自由である。つまり、こうした運動を選択することもできるし、選択しないこともできる。これらを外的な四肢に命令することもできるし、命令しないこともできる。こうして自身の要求によって、自発的に選択

したり命令したりして、必然性なしに強制なしに、選んでいるのである。ちょうどエヴァが自発的に、必然性なしに、また強制なしに、果実を食べることを選択し、器官に対して果実をかむように命令したように。しかしこうしたことは意志の自由なのであり、これはパウロの証言によって明白かつ強固に示されている。しばしばパウロは肉の義〔肉的な正しさ〕といったものがあることを告白していて、つまり規律であるが、再生していない人間はこれによって、外的に高潔な〔立派な〕行いをする。ちょうどテトスへの手紙で述べられている。私たちが行った義の業によってではなく等〔テト 3, 5〕。したがって何らかの肉の義があって人間が自身に、外的な律法の行いをするように命じることができる場合、そこにある意志の選択や自由があることは疑いようもないことであり、これは悪事よりも高潔な行いを優先させる。こうした議論を屁理屈にもてあそばれるままにしておいたり、ソフィストの嘘にまかせたりするのではなく、私たちは二つの手で真実の考えを保持するようにしよう。それは規律のゆえに人生にとって必要なことである。

さらに規律が厳しく導かれるようにとの神の掟があるとき、精神から規律を導く配慮が追い払われることはない。しかし道徳〔習慣や意志など〕を支配することが不可能であるか、あるいは役に立たないと思われる場合には、その熱意は不活発なものとなる。しかし規律が神から命じられていることは、まずパウロの言説から明らかである。律法は正しい者のために与えられているのではなく〔一テモ 1, 9〕。つまり手綱を引き締めて、規律が侵されるのを罰するためなのである。同じく、怒りを逃れるためだけでなく、良心のためにも、これに従うべきです〔ロマ 13, 5〕。

さらに恐ろしい罰がこの人生においてはすべての民族や家族に、規律を犯したことに対する神の怒りを示している。というのも永遠かつ強固な規則があるから。酷い違反〔過失〕は、この生においては現在の酷い罰によって罰せられるというもので、こうある通りである。剣を取る者は皆、剣で滅びる〔マタ 26, 52〕。同じく、神はみだらな者や姦淫する者を裁かれるのです〔ヘブ 13,4〕。同じく、残酷な者は自分の身に煩いを得る〔箴 11, 17〕。

ところで規律の有用性は強力である。これは現在および永遠の大きな悪を避けるのに役立つ。なぜなら多くの個人の過失は、個人的で公共的な罰によって罰せられ、人間が良心に反する過失に固執する限り、彼らの中で神は働きを及ぼすことはないからである。したがって良心に反する行動の意図が打ち負かされることが必要なのである。そうした選択は、ある程度は人間の意志の能力の中にある。こうした重要な理由によって、私たちは規律を理解することを学び、盲目な衝動を熱心に制御し、規律の馬勒を私たち自身のためにかぶせよう。

次に、自由の証拠は人間の身体の構成そのものにある。筋は意志の運動に仕え

るように、そのように人間の自然本性はつくられている。そのとき意志は運動の部位〔原動力〕に命令し、筋はそれに従う。こうした自由を否定することは、人間の制作の中での明白な経験に抗うことである。したがって外的な行為の選択において、ある自由があることは、もっとも確かなことである。これは、たとえ人間の自然本性に実際にとどまっているにせよ、それでも二つの原因によって妨げられている。ときどき情念の衝動は大きなものとなり、その結果として意志はその馬勒をゆるめてしまうが、それでも意志はそれをほどこうとしている。ときどき悪魔が人間を駆り立てて、その結果として忌むべき悪行に突進していってしまう。ちょうどネロがあらゆる種類の悪行をして回ったように。そうした狂乱は悪魔に由来するが、それにもかかわらず結果として自由が全くないというわけではない。なぜならネロも狂乱の始まりで何とかしてそれを避けることもできたであろうから。

しかし判断と徳によって秀でたダビデやソロモンやその他の人々にとってさえ、数多くの悲しむべき過失に陥る。こうして私たちは人間の自然本性の弱さを認識し、真剣に助けを求めるようになる。それは神が教会に約束しているものであり、教会は欲し、かつ厳しくそれが求められることを命じ、そうした助けが教会の中に現前し、憐れみが見いだされるようにと、熱心に援助している。それゆえに、こう言われている。まして天の父は求める者に聖霊を与えてくださる〔ルカ 11, 13〕。

外的な規律について語ったが、人間の意志はそれを何とかなし遂げることができる。今や他の種類の行為について語ろう。それは聖霊の動きなしには生じない。すなわち神への真の怖れ、真の信頼、これは死における恐怖、そしてその他の大きな苦痛に打ち勝つ。神への燃えるような愛、罰の中での変わらぬ信仰告白、欲望の炎、野心、競争心〔嫉妬〕に屈しないこと、大きな原因の中で情欲から解放されることである。

このような神に喜ばれる内的な運動〔心の動き〕は、聖霊の助けなしには生じさせられないことを私たちは知ろう。それでもこの中で意志は決して何もしないというわけではなく、まるで彫像のような状態であるわけでもなく、行為する者の原因と重なり合い、聖霊が神の言葉を通じて作用し、思考する精神と意志は矛盾することなく、この二つともやがて活動する聖霊に従い、それと同時に、神の助けを願い求めるようになる。そうマルコによる福音書 9 章にあるように。信じます。信仰のない私をお助けください〔マコ 9, 24〕。そのうえ駆動力に命令する次のような行為〔振る舞い〕は私たちの力である。私たちが読むように、聞くように、教えについて考えたりするよう命じたり、行われるべきではない以前に、良心に反して悪しき行為をやめるよう外的な四肢に命令したりすることである。

そしてここでは熱心に考慮されねばならない、二つの普遍的な呼びかけがある。

悔い改めの呼びかけと、恩恵の呼びかけである。神はすべての人間の中に、この自然本性の堕落の中に罪を明らかにしている。他方では、依然として次のように普遍的な約束もある。すべて重荷を負って苦労している者は、私のもとに来なさい。あなたがたを休ませてあげよう〔マタ 11, 28〕。神は仲保者である子に救いを求めるすべてに恩恵を与える。神の中では決して個人〔の人柄や名声〕は問題ではない。贈与に関する特殊性も考えられない。すべての者にサムソンの体力を与えるというわけではなく、すべての者を最高の音楽家にするというわけでもない。救いに関してそうしたことは考慮されるべきではない。救いは最高善でありすべての者にとって必要であり、普遍的な約束であるからである。

こうしたことを私たちは注視するとし、私たちへのこの真の慰めが胸中から追い払われるのを許さないようにしよう。神の意志に関しては神自身の言葉から判断されねばならないことは絶対的な真理である。絶対的に正しい言葉とは次である。あなたの言葉は私の足の灯、私の道の光〔詩 119, 105〕。したがってなぜ普遍的な約束を投げ捨て、他の見方を求めるのか。精神と心とを約束へと引き戻し、神の子を注視しよう。その声をあなたは聞き、あなたのために最高の祭司、そして仲保者であろうと欲していることを知るようにしよう。神の中に矛盾する意志があるなどと決して心に思い描かないようにしよう。

したがって疑念にふけったり、部分的なものをねつ造したりしないようにしよう。ちょうどサムソンの体力や音楽家について考えるようにではなく、あなたは二つの呼びかけを聞こう。つまり神の判断を畏れなさい、良心に反して生じるような悪しき行いを放棄しなさい、という呼びかけである。そして約束と神の子を注視し、あなたを聖霊が助けてくれるように願い求めなさい。こう言われているように。まして天の父は、求める者に聖霊を与えてくださる〔ルカ 11, 13〕。つまり、怠惰な者ではなく、怒る者ではなく、抵抗するものではなく、苦悩によって願い求める者にまさに助けがあるということである。

ここから約束は普遍的なものであるので、確かにすでに聖霊は精神に、意志に、そして心に点火しているのだから、私たちの何らかの賛同が生じなければならないことが理解される。それゆえに著述家たちの多くの言葉が公言している。アウグスティヌスはしばしば、恩恵が先行し、意志はそれに続く[*1]、と言っている。そしてしてクリュソストムスは、神は導かれる、望むものを導かれる、と。そしてバシリウスは、決心した者にのみ神は歩み寄られる、と。

闘争の中でこうした慰めは必要であるということは明らかである。なぜなら、直ちに極刑へと導かれる罪人に何を言えばよいのか。自らの悪行を見てすでにひどく苦しめられている者に対して。ここで確かに〔救いの〕約束へと導かれるこ

*1 Cf. Ad Simplicianum. I 2, 10.

とは必要であり、他の考察へ導かれてはならない。

ストア派の必然性への反駁
REFUTATIO STOICAE NECESSITATIS.

私は自由選択、もしくは人間の意志についての、真で単純なあらゆる教説をあげてきた。何らの疑いもなく、教会においてすべての学識ある者と敬虔なる者の永遠の一致はある。それ以上に付加されることは必要ではなかったが、しかしそれにもかかわらず若者たちが、ストア派の必然性に関する見解に賛同させられないように警告されるのは有用なことである。これはたとえ馬鹿げていて、しかも共同生活とは相容れないにしても、それにもかかわらず拍手喝采する者がいるからである。というのも〔人間の〕自然本性はある程度、異国の馬鹿げた見解に感嘆するようになっていて、他のものに異議を唱えることに栄誉を帰するようなところがあるからである。こうしたことはヴァッラによる反駁の熱意の中に生じていて、それは多大な努力をして人間の意志を自由から引き離し、すべての自然と人間のあらゆる運動において必然性を打ち立て、誤ってストア派の狂乱へとパウロによるローマの信徒への福音書第 9 章の言葉を適用する。これは自然と人間のすべての動きについて語られているのでは決してなく、ストア派の戯言とは完全に異なるものである。しかし第一に弁証法〔論理学〕から、「必然性」と「偶然性」という言葉が何を意味しているのかが学ばれねばならない。ここでは次のように素描を短く引用しておけば十分である。必然性とは、それを反論することが不可能で、あるいはそれが生じるとき、もしくは生じてしまったとき、そのように生じない、あるいは他のように生じないということが、ありえない、ありえなかったということを意味する。方法については他の場所で語られる。しかし偶然性は、何かが生じたとき、原因があり、それがその自然本性から違うようにすることができて、両方の部分に、つまり必然性と不可能性とに対立させられることを言う。パリスがヘレナを奪ったというのは、偶然性についての陳述である。というのも、たとえもしこのことがそのように生じた後に、それを変えられることができないなら、それゆえに偶然性によるものと言える。なぜなら出来事を支配する原因は、異なるように導くこともできたし、出来事が異なるようにすることもではきたからである。しかし偶然性と行動や出来事の可変性の源泉は、神における意志の自由、理性的な被造物における意志の自由、さまざまにかき乱す物質の構成要素〔元素〕のさまよう運動にある。さて魂にはストア派への堅固で明確な反駁がこのように刻み付けられている。神は違反〔過失〕の原因ではなく、それを望みもしないし、引き起こしもしないし、よしとしもしないし、さらに理性的な自然本性を、善であるように制作した〔つくり上げた〕ことは極めて確実で

あるので、理性的な自然本性は自らの意志によって自由に、何ら必然性なしに〔必然性に駆られることなく〕、何ら強制されることなく、自ら神より転じたということになるわけである。したがって意志の自由はあるのであり、意志は異なるように振る舞うこともできたのである。こうであるので、偶然性が明白であることになる。この限りで続いて人間の意志による外的な行いについて語られ、常に詩編の言葉が現れることになる。あなたは不正を喜ぶ神ではなく〔詩 5, 5〕。この神聖な証言は常にストア派の必然性と対立させられている。そしてたとえ喧嘩好きな人々が不思議な迷宮をこの問いの中に建設することができるにせよ、それにもかかわらず神々しい証言を、もしかするとどうしても抜け出せないと見えるような、彼らの詭弁的詐欺の前に置くことにしよう。ところで私たちは、すでに述べたように、神の証言に信頼するのだが、しかしそれでもプラトンの言葉はすべての教養ある者たちにもっとも知られてしかるべきである。このプラトンの言葉は『国家』第 2 巻にある。「神が善き者でありながら、誰かにとって諸悪の原因となるというような主張に対しては、もし国が善く治められるべきならば、自分の国において何びとにもそのようなことを語らせないように、また老若を問わず何びとにもそれを聞かせないように、われわれとしてあらゆる手段をつくして戦わなければならない」[*2]。さらにプルタルコスはエウリピデスの言葉を引用している。「もし神々が何か悪をなすのなら、それは神々ではない」。そこで私は重要な議論の解決を付け加えたいと思う。

第一
Primum.

神による決定は不変的で必然的に真である。
すべては神の決定によって生じる。
ゆえにすべては不変的な必然性によって生じる。

解決
Solutio.

まず小前提に答えよう。神による決定は、特に自身の意志によるものの中で異なっていて、さらに第一にあるいは特に私たちの意志によって生じるものの中で異なっている。神は他の仕方で来るべき死者の復活を定め、そして同様に、これは神自身の固有の業である。また神は他の仕方で人間の悪行を、それは許されて

*2 『プラトン全集 11』岩波書店、1976 年、164 頁。

いるのだが、予見し定めている。

こうした予見あるいは決定は、私たちの意志の必然性に対して全く何ももたらしはしない。すなわち神は予見し、将来の出来事があるので、決定してはいる。それが許されるまでは。さて大前提に答えよう。神の決定は不変であり、必然的であるのは真実である。すなわち帰結の必然性によってであるが、それは単純に必然性をもたらしはしない。神はサウルの不品行を予見しているし、さらに定めているし、あるいはそれが許される限りは、限界を設けている。

こうした予見と許可は、サウルの意志に対して全く何ももたらしはしない。しかしサウルは自身の悪行を避けることが可能であった。

ゆえにそうした弁証法的な帰結の必然性は、事柄自体の偶然性を取り除くことはないし、あるいは自由を除去することもない。事例は聖なる歴史においても明らかである。エレミヤは、確かに破壊することを前もって言ったときに、こう述べている。私が、一つの国民と一つの多くについて、それを引き抜き、引き倒し、滅ぼすと語ったその時、その国民が私の語った悪から立ち帰るなら、私は下そうとした災いについて思い直す〔エレ 18, 7f.〕。さらにヨナはニネベが滅ぼされるのを予言していた〔が、神はそれを思いとどまった〕〔ヨナ 3, 4ff〕。

そうした決定はすでに預言者の声によって公示されていたとはいえ、それにもかかわらず神は、私たちが学ぼうとするがゆえに、それを撤回した。神はストア派ではない。それゆえに神の意志に関して、次のような短い言葉がある。

たとえ自身がどれほど堅固なものに遭遇しようとも
　私たちは願い求めるとき、神によって厳しい運命は過ぎ去る
神は決して囚人を閉じ込める神パルカではない
　そうしたものはストア派によって神と思われているが
これは空飛ぶ太陽の馬車を引きとどめることができる
　これはあたかも岩のように、流れに対してとどまっていることを命じるのだ。

二つ目の議論
Secundum argumentum.

連結した原因は、必然性によって動く。
すべての出来事は、連結した原因によって生じる。
ゆえにすべては必然性によって生じる。

大前提をストア派は次のように強める。天の動きが必然的であるのは明らかで

ある。次いで、それより下位の身体が天から働きかけられて〔影響を受けて〕いることは明らかであり、そのように天から影響を受けた状態にあることは確かである。ちょうど夏に照らす太陽の中で、大地が熱せられるのが必然的であるように。このように自然の秩序から他のものに効果が続いてゆく。果実の成長や、その他のもののように。こうした活力的な自然の秩序から、彼らは意志的なものへと進み出ていく。アントニウスにおける気質はそのようにある。したがってそれは必然的に彼を駆り立てる、など。しかし短く大前提が間違っている、と答えられねばならない。というのも、たとえある自然の活力と結び付いているにしても、ちょうど天や、空気や、大地や、動物的身体における気質といったものと結合しているにせよ、それにもかかわらずそうしたものとの結び付きは人間の意志の必然性とはならず、意志は自由に偶然的に振る舞う。人間の行動における偶然性の原因は、意志の自由にある。

たとえ熱く節度のない肝臓が、過度へと傾くにせよ、それにもかかわらず意志は自由であり、四肢に対して、そうした傾向に従うことのないように、と命令することができる。これが極めて真実であることは、上に示した次の言葉からも分かる。あなたは不正を喜ぶ神ではなく〔詩 5, 5〕。さらに人間の活動そのものにおいても、駆動力が意志によって自由に導かれることは、経験が証している。そしてもし人間が法に従うことができず、外的な行動においてある程度のところ制御されることがないなら、すべての政治的秩序は空しく建てられていることになってしまう。キケローもまたこのように、意志が先行する原因によってありうるということを否定しながら、ストア派の議論に答えている。ちょうど自身が名づけるように、つまり、対象から、あるいは事物の傾向から、星や、もしくは気質によって強いられるというようなことはない、と。

こうしたことは自然学の中で豊富に説明されている。そこでは自然の活動力と、意志とのあいだの違いが語られている。たとえ星々が影響を与えるにせよ、それにもかかわらずそれは部分的であり遠い原因であり、意志はこれらに対抗することができる。そして多くの傾向は反対の習慣によって弱められる。

第三、弁証法的な議論
Tertium argumentum Dialecticum.

二つの矛盾する命題が同時に真であることは不可能である。
キケローは執政官になるであろう、というのは真である。
ゆえに、その反対〔執政官がキケローになるであろう〕が真であるのは不可能である。もし不可能であるなら、キケローは執政官にならないであろう、というこの命題は真である。こうして他方の必然性が真であることが帰結す

る。キケローは執政官になるであろう。

解決
Solutio.

答えよう。私は小前提を否定する。というのもこの陳述、キケローは執政官になるであろう、というのは未来に関する陳述である限りは、人間の判断によっているわけであり真の決定ではない。というのも真実は、事柄の存在に続いて生じるからである。したがって事柄が存在しているのなら、それは真の陳述である。しかし未来はまだ存在していない。ゆえに未来に生じるであろうことに関する陳述は、人間の判断による限りまだ存在していないのであり、不確かである。いわば事柄はまだ存在し始めていないのである。

したがってキケローは執政官になるであろうというこれが不確かであるなら、反対の陳述〔執政官はキケローになるであろう〕が不可能であるとは、まだ推論できなくなる。次いでもし小前提が続く必然性によって真であるなら、すなわち、そのように生起するのであり、やはり続く必然性は単純に必然性を引き起こすわけではなくなる。

キケローは『運命について』という書物の中でこの議論に対して次のように答え、自身好んですべての言明は真であるか誤りであるかのどちらかであるというのを否定している。彼は、運命によってすべてが生じると承認してしまうよりも、むしろ「衝突」のほうを受け入れようと述べている[*3]。しかしキケローは、未来に生じるであろうことに関する陳述が、なぜ真か偽か決定されていないのかということを、説明してはいない。

しかしアリストテレスは、真実とは事柄の存在に付随する独自性であり、すなわち事柄が存在を有するのであり、こうして陳述は真であるということを、明確に述べている。しかし未来はまだ存在を有してはいないし、そのうえ生じないというのも可能なのである。こうしたことが弁証法において十分に説明される。

神学〔神学的考察〕
THEOLOGIA.

フィリピの信徒への手紙 2, 13。あなたがたの内に働いて、御心のままに望ませ、行わせておられるのは神であるからです。

ゆえに神からの促しによってすべてが生じるとき、自由は存在しない。

---

*3 『キケロー選集 11』岩波書店、2000 年、296 頁以下、参照。

答えよう。私は帰結を否定するが、その理由は、続く発言から単純に次の発言へと、確かに二つの種類に至るのは偽りであるからである。

第一に、個別的なものから普遍的なものが推論されるからである。神は教会における善に働きかけるがゆえに、普遍的に善と悪とに働きかける。この帰結に当てはまらないことを、すべての人々は理解している。しかしパウロが言う次のことは極めて確かであり、ちょうど多くの他のもの〔聖書の言葉〕のように、ただ教会における善き振る舞いについてだけ彼は公言していて、これはもっとも甘美な慰めであり、それはストア派の見解には決して変容させられないものである。すなわち彼は信仰の初歩者に話しかけていて、試みや闘争の大きさによって落胆させられた者にではない。後に彼らは気落ちする。私たちは召命、約束、神の現在と助けを認識することで慰められる。第一に神は私たちを計り知れない憐れみによって呼び寄せている。そして暗闇と地獄から連れ戻す。神は、ただ始まりがあるように呼び寄せるだけではなく、教会においてそのように始まったように、事柄が完成するように欲していて、ある集団を集めて、ある教会の宿を保ち、忍耐によって永遠の生を与えようと欲しているのである。

第二に、続く発言から必然性が悪く推論されてしまい、単純な発言へと繋がっていく。というのも、たとえ神が私たちを助けるにしても、それにもかかわらず教えを受け入れる意志のある者は、意志することによって助けられ、真の祈りによって助けを請い求め、ちょうどマニ教徒が思い浮かべるように、ある暴力によって強制されてではないからである。

というのも神は真に呼び寄せていて、その約束が決して徒労に終わらないことを欲し、それと同時に祈りが点火され実践されることを欲しているからであり、その後には危険と闘争とを制御しようとしていて、未完成の恩恵を完結しようと欲していることは、確かに主張されなければならない。したがって私たちにはもっとも甘美な慰めが伝えられていることを思い起こそう。これはストア派の必然性には全く関わらないもので、同時に熱心な祈りによって助けを私たちが願い求めることを要求している。しかし目的因が追加される。なぜ神は私たちを呼び、なぜ教会を集め、極めて激しい闘争の中で〔私たちを〕救うのか。ちょうど、こう言うように、あるものはそれに好ましいように生じる、と。こうした目的因は、ギリシアの言葉でパウロの中に記されている。これはさまざまな異なる解釈によって損なわれているが、パウロは次のことだけは述べている。全人類が神に歓迎されないことのないように、神は計り知れない憐れみによって教会を集め、これを助けている、と。そして人類のある程度が神に従い、永遠の死へと埋葬されてしまわないように、と。

別のもの
Aliud.

箴言 16,9。人間の心は自分の道のことに思いを巡らすが、主がその一歩を確かなものとする。
ゆえに意志の自由はない。

答えよう。どの言葉が意志の選択について語っていて、どれが結果について真に語っているのかを、懸命に考えなければならない。なぜなら選択と結果とのあいだには巨大な違いがあるから。アントニウスは支配を欲し、この選択の原因は、ただ彼の意志にあるが、しかし結果は他の多くの原因にかかっている。サウルはダビデの死を望むが、結果は妨害される。

したがって選択と結果とのあいだには極めて大きな違いがあるのだから、結果に関する言説を意志の選択を否定するのには充てられない。サウルがダビデの死を欲することができたというのは明らかだが、結果は他のものから妨害された。これらの〔聖書の〕言葉は教えであり慰めである。私たちの信頼〔自己信頼〕を防ぎ、召命の正しさと一致を欲するように忠告し、私たちは神の助けを願い求める。そのうえ恐ろしい事柄によって落胆させられることなく、正しいことを行うのを止めないように忠告する。というのも結果は人間の意志のみにかかっているわけではないからである。ファラオは、たとえ欲し決心するにしても、イスラエルによって圧迫されるだろうとは確信はしていない。追放されたイスラエル人たちは、たとえ散り散りにされたにしても、神がバビロンで教会を保護していることを、見込みなしと諦めることはしない。

別のもの
Alidud.

エレミヤ書 10, 23。主よ、私は知っています。人間の道はその人自身のものではなく、歩く者が自分自身の足取りを、確かにすることもできないことを。
ゆえに意志の自由はない。

私は帰結を否定する。理由は、個別的なものからの帰結が普遍的で否定的なものに妥当することはないからである。召命において私たちはすべてを予見することはないし、すべてを成し遂げることもできない。ゆえに私たちは何も予見しないし、何もしない。というのもこの文章は召命について語られていて、それは道と名づけられていて、排他的に理解されなければならない。つまり人の道はその

人自身のものではなく、すなわち召命は人間の計画や力だけで都合よく導かれるのではなく、私たちは神の助けが必要であることを知るべきであり、ちょうどよく似たような言説が教える通りである。もし、主が家を建てるのでなければ、など〔詩 127, 1〕。同じく、私を離れては、あなたがたは何もできないからである〔ヨハ 15, 5〕。

したがって私たちの中に、注意深さと信仰とが同時にあるべきである。再生したダビデの中には、なすべき職務へ向かう、意志による何らかの努力があるが、しかし信仰がさらに続いて、神の助けを願い求める。すると神は真に援助しようと欲していて、自身から援助を待ち望んでいて、私たちが神の助けなしに無事に物事を行うことができないかのような礼拝を求めている、と確かに決心することなる。詩編の声は次のように教えている。あなたの道を主に任せよ。主に信頼せよ。主が成し遂げてくださる〔詩 37, 5〕。こうした注意深さと信仰との結合に関する教えは、ストア派やエピクロス派による狂乱などから免れるために、優れた生の規則の中で保持されなければならない。そして私たちは、固有の知恵による信頼を自慢したり、もしくは絶望によって証明を放棄したりしてしまう、そうした神なしの人生を歩まないようにしよう。

エフェ 1 より、別のもの
Aliud Ephesios I.

> キリストにあって私たちは、御心のままにすべてのことをなさる方のご計画に従って、前もって定められ、選び出されました〔エフェ 1, 11〕。

答えよう。この普遍的な言葉は両方の行いの種類について述べているのではなく、つまりすべての人間による悪しき行為と善き行為についてではなく、ただ教会における神の恩恵について述べているのであり、つまり召命、選び、導き、そして教会による栄誉ある赦免等についてである。それは私たちを強めるためであり、自らの弱さだけにとどまらないようにするためである。さまざまな危険や不和の中でも、教会はただ人間の力や計画によって支配されていると見なし、それゆえに絶望によって落胆させられ、教えを捨ててしまわないようにするためである。それどころかパウロは言っている。神は教会と共にあり、あなたたちに助けをもたらすことを知りなさい、と。その憐れみそのものによって神は、すべての被造物から見捨てられたアダムとエヴァを受け入れ、そして子は常に教会の見張人であり、そうであろう者であったのである。この見張人がノアの箱舟を導き、エジプトから連れ出された人々を救助した。教会におけるこうした継続的な恩恵について、パウロは、神はその意志に従ってすべてを行う、と述べている。つま

り教会のすべての恩恵は神による驚くべき計画によって明らかであり、私たちが理解することなど超えている、ということである。そして言葉を識別する中で、注意深さと思慮とが適用されなければならない。さらに状況が熟慮されなければならない。それが何を明らかにし、どのような様相について語られているのか、と。

箴言 16 より、また別のもの
Aliud Proverbiorum 16.

主はそれに答えてすべてのものを、災いの日のために悪しき者さえも造った〔箴 16, 4〕。

答えよう。自然は不信心な者たちから区別されなければならない。神が自然の創作者であるとはいえ、それにもかかわらず不信心な者たちは他の原因をもっていて、不敬虔な者たちは自然を自由に濫用する。ファラオ、サウル、そしてその他のものたちは意志して滅んでいく。しかしながら神は彼らに忍耐し、しばらくのあいだ狂乱するに任せておくが、次に彼らを驚くべき仕方で打ちのめす。その結果、神の判断の証言が確かとなり、偶然に人間の事柄が生じるのではないことを私たちは知る。したがって神は不信心な者たちの原因である、というようには続かない。そうではなくただこう続く。自然は初め神によってつくられたが、しかし後に他の者から腐敗させられ、しばらくのあいだ狂乱する者たちは持ちこたえられる。その結果、続いて不信心な者たちは罰の中で、そして教会の自由において、神の現在が認められることとなり、罪に対する怒りが認識されることとなり、彼ら祈る者たちの救いの中で憐れみが認識されることになる。

必然性に関する特別な議論が説明された後、私は読者に明確に警告する。次のように、真理を把握し、誤った見解を避けることは、神の命令であるがゆえに。偽りの証言をしてはならない〔出 20, 16〕。必然性に関するストア派の狂乱者たちのように、馬鹿げた見解を主張する厚顔無恥を避けるのだ。彼らは神に敵対してとりわけ無礼であり、道徳に対して破壊的であるからである。

(以下その 3 に続く)

謝辞
本研究は JSPS 科研費 JP19K00112 の助成を受けたものです。

（ひしかり てるお・教授）